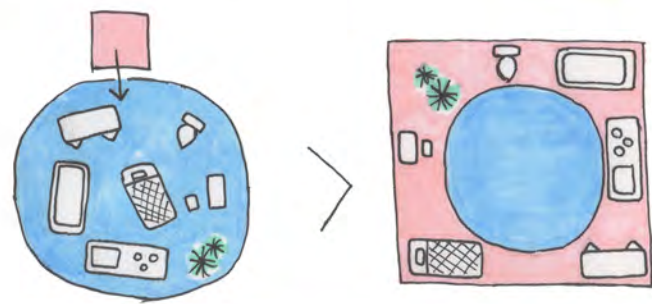
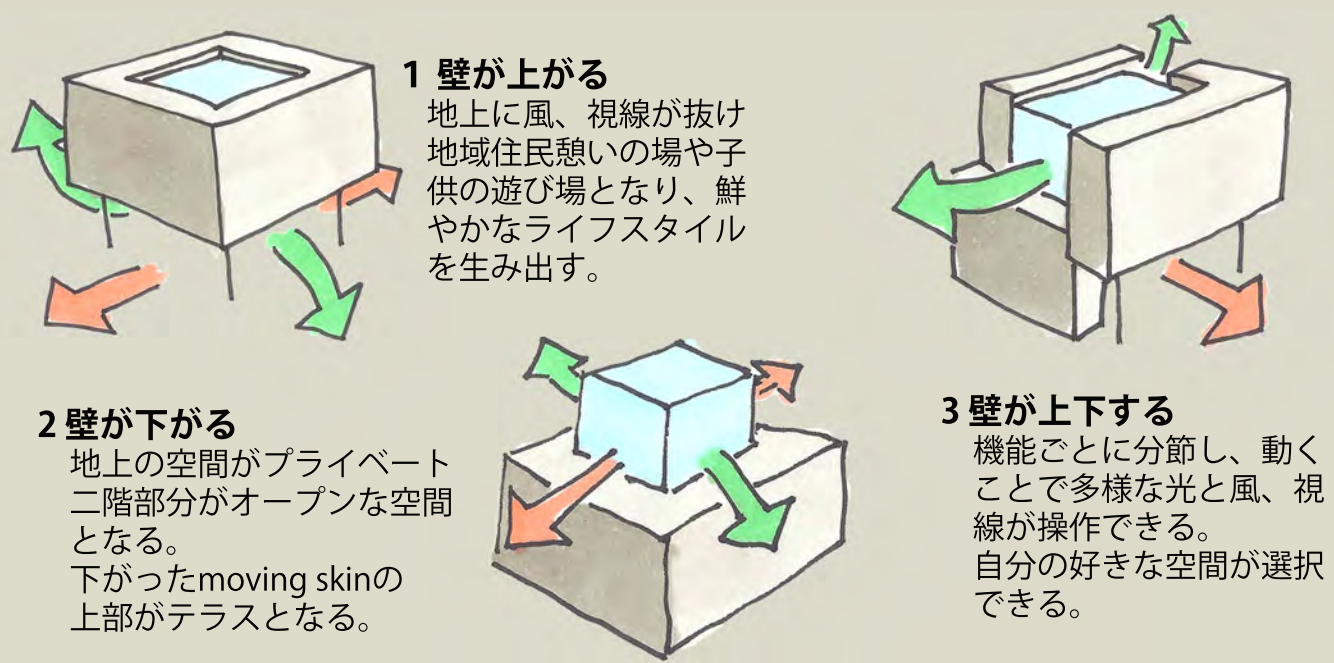


現代。日本は道に沿って建物が並べられ人の居場所が追いやられてしまっている。しかし土地が少ないため、そういった場もつくることできないでいる。そのため立体的に建物がつくられている。それをつなぐのは他でもないエレベーターである。
従来のエレベーターは移動のみの機能で閉鎖感があり空間とのつながりを持っていない。エレベーターが空間構成の一つとなることはできないだろうか。そこで私たちはmoving skinシステムを考え始めた。



エレベーターに機能を収納することで、西洋のライフスタイルLDKを見直し、日本の生活習慣出し入れという文化を再現する。昔の日本は一つの空間が出し入れすることで変化し専門的な室を持たない。moving skinが立体的に移動することで出し入れする多層の空間という新たな伝統を生む。



1 壁が上がる

地上に風、視線が抜け地域住民憩いの場や子供の遊び場となり、鮮やかなライフスタイルを生み出す。

2 壁が下がる

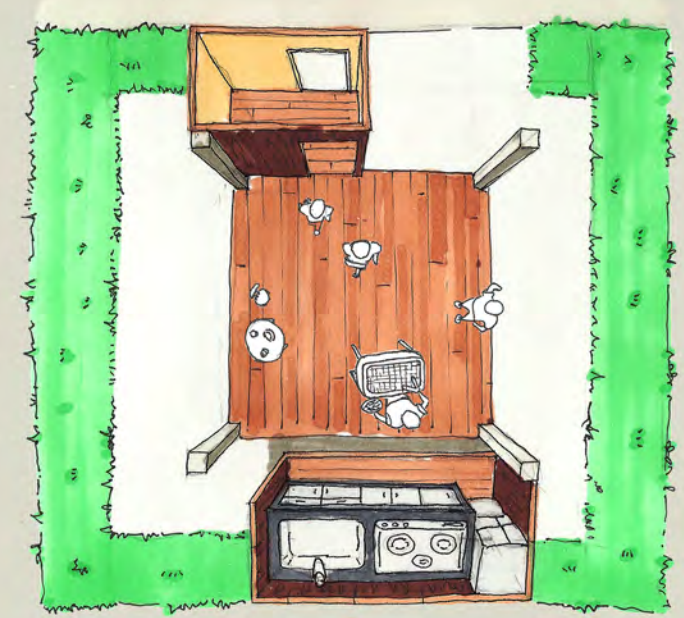
地上の空間がプライベート二階部分がオープンな空間となる。下がったmoving skinの上部がテラスとなる。

3 壁が上下する

機能ごとに分節し、動くことで多様な光と風、視線が操作できる。自分の好きな空間が選択できる。



上部 5 mx 5 mの家



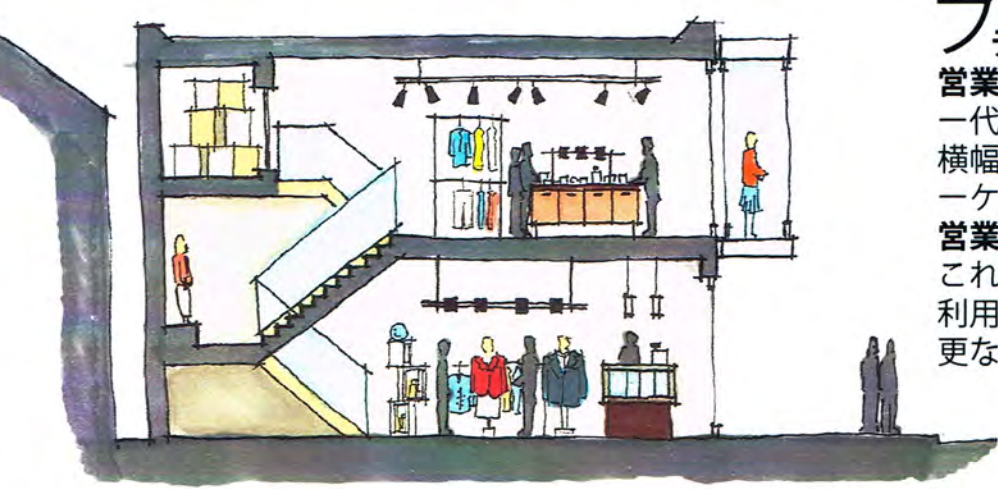
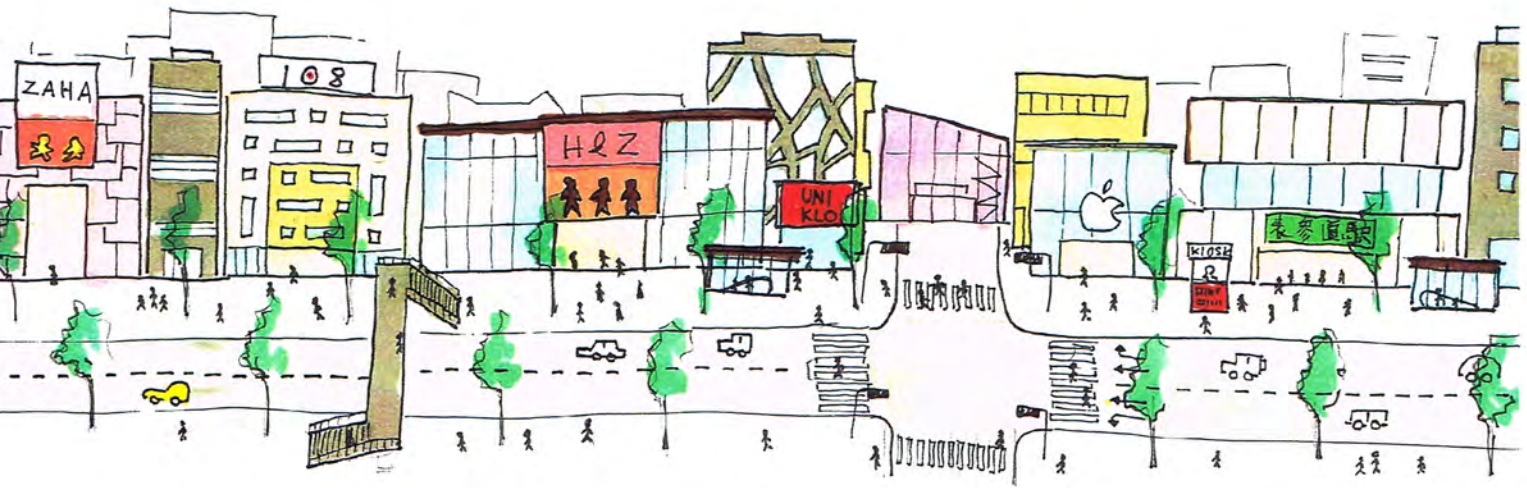
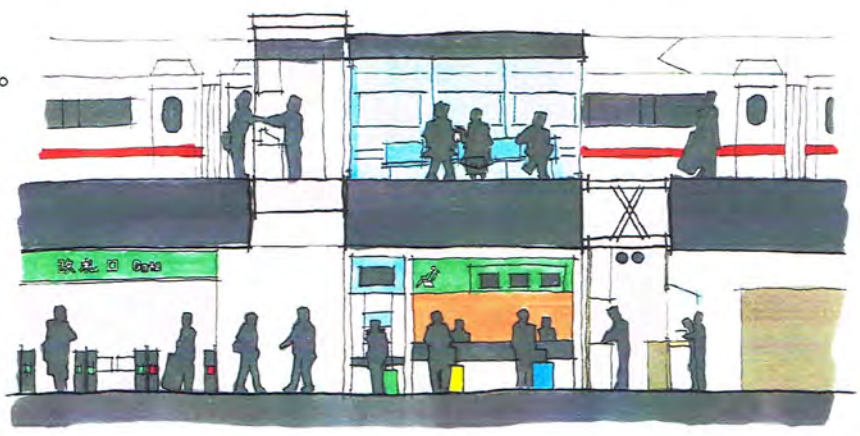
下部のスペース

Conclusion

moving skin は一人一人が活躍できる都市の革命である。住宅だけでなく普遍的に機能するシステムである。住宅以外、交通、商業施設、営業施設なども、利用でき、moving skin が普及していくことで動く空間が都市に広がりやがて動く都市が出来上がる。そこでは人々が移動し、多様な都市環境と人間関係を生み出していく。

住宅の場合では、自分にとっていつもの空間がmoving skinが移動することで、お住まいの表情が変わっていく。それが、住む人の性格と反映され、都市に現れてくる。例えば、お隣さんと一緒にバーベキューしたり、おはなしたりする空間をつくるのが可能になる。

駅 朝のラッシュの時間帯はホームに人がたまり、新聞や飲み物などの需要が増えるためキオスクをホーム階に上昇させる。また、改札階にて朝食需要を狙い立ち食い飲食店は改札階に下げる。**日中**は乗り換え時間の昼食需要を狙い、立ち食い飲食店はホーム階にあげて営業し、ホーム階には人が少なくなってくるのでキオスクは改札階で営業する。**夜間**はチケットオフィスが閉店するので、キオスクと立ち食い飲食店をシャッター代わりにこれらを改札階で営業する。これは改札階に人が多くなる時間帯でもあり、これらの需要を見込む事ができる。



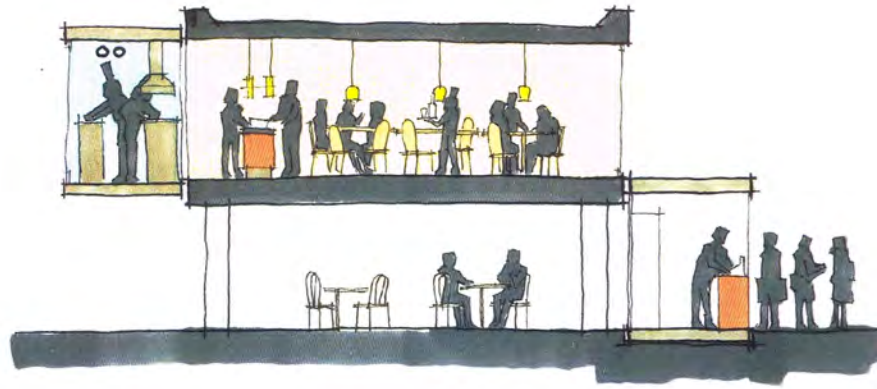
ブティック

営業時間外はショーケースがシャッター代わりになって宣伝効果を狙える。横幅の狭い商店街などの路面店でもショーケースを店舗前に構えられる。
営業時間中はショーケースを上昇させ、これを2階店舗のショーケースとして利用する事でこちらでは販促効果が狙え、更なる客単価アップが可能となる。

レストラン

朝食と昼間の時間帯は、事務所が地上階に降りて**通勤・通学客**の弁当需要をねらう。夕方の時間帯では**昼食と夕食の時間帯**とは違い、レストランの需要が下がるために厨房を地上階にさげ、テラス席のカフェとして営業して隙間需要を満たす。

夕食時は事務所を上昇させ、従業員の休憩室と事務仕事をするスペースとして利用する事ができる。



漫画喫茶

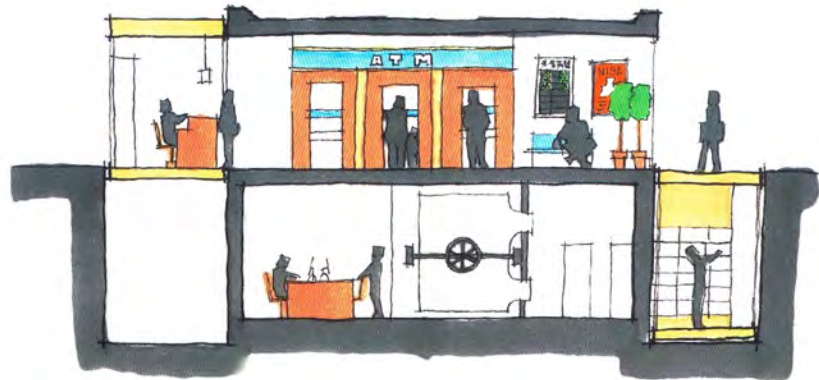
地上階で受付を済ました利用客はエレベーターで二階にあがる事となるが、本棚がエレベーターにある事で本を選びながら上階にあがる事ができる。

シャワーを浴びにいくついでや、**退室するとき**などにも気軽に利用する事ができる。

銀行

日中の**銀行営業中**はカウンターと貸金庫を支店のある階にあげて通常営業ができる。

銀行の**窓口業務が終了**するとこれらを下階に下げ、ATMコーナーとして営業でき、これにより防犯性が高まり、ATMコーナーの24時間営業がしやすくなる



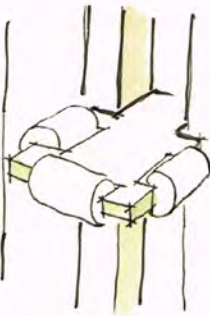
動作機構

動作機構では外部にレールなどの動作部を露出させないよう、スリット内部で完結するようにしている。

これによって、外部計画がより自由になり、景観を損ねることのない動作部を実現した。



動作機構内部ではローラーがついており、このローラー内部がリニア式のモーターで稼働することによって上下する。リニア式モーターを採用することにより、より静かで滑らかな上下動作が可能になり、かご内でのアクティビティがより広がる。



THE MOVING SKIN 想定場所 日本

現在、日本は道に沿って建物が並べられ、人の居場所が追いやられてしまっている。しかし土地が少ないため、そういった場もつくるできないでいる。そのため立体的につなぐのは他でもないエレベーターである。従来のエレベーターは移動のみの機能で閉鎖感があり空間とのつながりを持っていない。

そこで私たちは"moving skin"システムを考え始めた。エレベーターに機能を収納することで西洋のライフスタイルであるLDKを見直し、日本の生活習慣で行われていた「出し入れする」という文化を再現する。昔の日本は一つの空間ですべてのことが行なわれていた。その発展系がこの"moving skin"システムである。"moving skin"が上がると地上にパブリックな空間が広がり、下がるとプライベートな空間となる。また上下することで多様な空間が生まれる。

住宅の場合では、自分にとっていつもの空間が"moving skin"移動することで、住まいの表情が変わっていく。それが住む人の性格として都市に現れてくる。例えば、お隣さんと一緒にバーベキューしたり、お話ししたりする空間をつくるのが可能になる。駅の場合では朝のラッシュの時間帯はホームに人がたまり、新聞や飲み物などの需要が増えるためキオスクをホーム階に上昇させる、改札階にて朝食需要を狙い立ち食い飲食店は改札階に下げる。日中は乗り換え時間の昼食需要を狙い立ち食い飲食店はホーム階に上げて営業し、ホーム階には人が少なくなってくるのでキオスクは改札階で営業する。夜間はチケットオフィスが閉店するので、キオスクと立ち食い飲食店をシャッター代わりにこれらを改札階で営業する。これは改札階に人が多くなる時間帯でもあり、これらの需要を見込むことができる。

このように"moving skin"が普及していくことで動く空間が都市に広がりやがて動く都市が出来上がる。そこでは人々が移動し、自ら空間を生み出していく。"moving skin"は一人一人が活躍できる都市の新たなシステムである。